

平成 29 年度岐阜県人材養成事業 「まちづくり講座 in 尾崎」 報告書

— まちづくり型生涯学習参加者の参与意識 —¹

宮本邦雄

(東海学院大学人間関係学部心理学科)

要 約

本報告は、平成 29 年度岐阜県人材養成事業「まちづくり講座 in 尾崎」のワークショップとグループ自主活動からなる生涯学習型まちづくり活動の経過と成果及び課題をまとめたものである。活動の中で住民と学生が残した記録から、活動の開始・展開・まとめに取り組む参与意識がどのように変化したか検討することを目的とした。全体ワークショップの第 2、3 回は、質問項目への回答はおおむねポジティブであった。しかし、個別のグループ活動を行い、その最終報告会の回答からは、「満足度はやや低く、難易度はやや不適当であり、今後発展させたいとは思わない」というネガティブな傾向もみられた。前半のワークショップでは参与意識の高い参加者も、グループ毎の自主活動が進むにつれて、課題を難しく感じ、負担感が増したと考えられる。

キーワード：まちづくり、生涯学習、地域住民と大学生、参与意識

問題と目的

団塊世代の定年退職に伴い、高齢者の生涯学習について、趣味・教養の学びから地域課題の学びへ、私的学びから公共的学びへという「開かれた学び」が注目されるようになった。キャリアの中で形成されてきた知識や技術を生かして、地域の活性化につながるボランティア活動も推奨されてきた。個人が趣味や教養として行う生涯学習から、組織的に集団として社会的貢献を实践する生涯学習への移行である。

生涯学習における個人志向から集団志向への変化は、生涯学習への関与についての世代間比較により明確になる。われわれは、福祉や自然、文化的活動ばかりでなく、スポーツ活動も生涯学習の側面としてとらえ、高齢者世代においては仲間との楽しみの共有が重要であることを報告した(宮本・磯辺,2014;2015)。

少子高齢化社会の進行に伴い、地域社会の衰退が顕在化しつつある。岐阜県の地域を取り巻く状況に関して、平成 23 年度調査では「地域のつながりを感じているか」という質問項目には「とても感じる」「どちらかといえば感じる」75.6%であったが、平成 27 年度では 68.9%に低下している。また地域活動や運営面の課題については、「担い手の不足や高齢化」(71.8%)、「参加者の減少・固定化」(66.7%)という回答が多い(県政アンケートモニター,2011;2015)。

さらに核家族化の流れに伴い、65 歳以上の一人暮らし高齢者の増加は男女ともに顕著である。昭和 55

(1980) 年には男性約 19 万人、女性約 69 万人、高齢者人口に占める割合は男性 4.3%、女性 11.2%であったが、平成 22 (2010) 年には男性約 139 万人、女性約 341 万人、高齢者人口に占める割合は男性 11.1%、女性 20.3%となっている(高齢者白書,2016)。

岐阜県の生涯学習は、岐阜県生涯学習振興指針「地域づくり型生涯学習」の推進による「清流の国ぎふ」づくり(平成 29 年策定)が示す 3 つの基本方針、1.「地域づくり型生涯学習」の推進、2.「地域で活躍する人づくりの推進」と「地域・社会への参画の推進」、3.「地域づくり型生涯学習」による地域の「絆」とコミュニティの再構築をふまえて、振興施策が展開されている。その一つが「地域づくり型生涯学習」の推進を支える人材の育成であり、「地域づくり人材養成講座」という事業が実施されてきた。これは、高齢化や地域活動の担い手不足など、地域における様々な課題を解決するため、自ら地域の活性化に向けた活動を実践することができる人材(地域のリーダー)の養成を図ることを目的としている。平成 29 年度事業として各務原市の「まちづくり講座 in 尾崎」が選定された。

各務原市尾崎地区は、昭和 40 年代に開発された県営団地を中心とした宅地地域であり、自然豊かな坂の町である。尾崎地区が抱える地域課題としては、高齢化に伴う人口減少によって、空き家の増加、県営団地の入居率の低下があげられる。さらに地域のリーダーとして若者の人材が不足しており、祭りやイベントなど地域行事の

縮小化がみられる。近隣に位置する東海学院大学は、人間関係学部心理学科と子ども発達学科、健康福祉学部総合福祉学科と管理栄養学科、さらに大学院人間関係学研究科からなる総合大学であり、高齢者支援や子育て支援、福祉や健康領域での専門性を生かした地域貢献が望まれていた。

「まちづくり講座 in 尾崎」は、地域住民と学生が地域の課題と魅力や特色を発見し、活動を通して地域の活性化に取り組むことを目的とした。プログラムは、地域課題の発見と活動企画の検討を目的とした前半の全体及びグループごとのワークショップ、後半はテーマ別の自主活動から構成されていた。本報告は、「まちづくり講座 in 尾崎」の活動内容を継続的に整理するとともに、生涯学習型まちづくりの活動の中で住民と学生が残した記録から、活動の開始・展開・まとめという過程においてまちづくり活動に取り組む参加意識がどのように変化したか検討することを目的とした。

方法

参加者：各務原市尾崎地域の住民 41 名、東海学院大学学生（大学院生 5 名、健康福祉学部学生 7 名）、計 12 名が参加した。なお、大学教員 9 名、岐阜県職員 2 名、各務原市職員 3 名が支援に参加した。

実施期間：平成 29 年 5 月～平成 30 年 1 月までの 9 か月間であった。

実施場所：ワークショップ等は各務原市尾崎中央ふれあい会館及び集会所、野外活動は公園及び隣接する低山であった。

プログラム内容

1. 事前準備：平成 29 年 3 月、各務原市出前講座「地域の魅力再発見！地域づくり型生涯学習」
2. 第 1 回講座（5 月）：開講式（事業概要説明）、全体会（尾崎地域の概要、東海学院大学の概要）、グループ交流
3. 第 2 回講座（6 月）：グループ・ワークショップ（GrWS）（まちづくりの活動を考えよう①）
4. 第 3 回講座（6 月）：先進事例から学ぼう（かかみがはら暮らし委員会の活動、兵庫県明石市「明石舞子団地」まちづくり活動）
5. 第 4 回講座（7 月）：GrWS（まちづくりの活動を考えよう②、具体的活動計画の立案）
6. 7 月～12 月：自主活動（地域内でのイベントを実施、報告会の準備）
7. 中間報告会（10 月）：発表会を予定していた東海学院大学学園祭が台風で中止
8. 第 5 回講座（12 月）：自主活動の振り返りとまとめ

（最終報告会の準備）

9. 第 6 回講座（1 月）：まちづくり講座最終報告会（東海学院大学で開催）

各講座についての意識調査（振り返りシート）

「テーマや課題を共有できた」、「リラックスして参加できた」、「いろいろな意見に関心をもてた」、「次々と話題がつながった」など 10 項目に 5 件法で回答を求めた。さらに、自由記述で、感想・質問・希望などを記入してもらった。

1～5 は、尾崎ふれあい会館で 13：00～15：30 に実施された。各ワークショップの構成は、基本的に、目的と活動内容の説明、第 1 回グループ WS、グループ間交流、第 2 回グループ WS、グループ WS の発表という順で進められた。グループ毎の自主活動は、ふれあい会館や集会所、屋外の公園や付近の低山で行われた。筆者は、ファシリテーターとして全ての全体ワークショップに参加し、できるだけグループ毎の自主活動にも参加した。

なお、本報告を作成するにあたり、個人情報の保護等の倫理的配慮について、実施母体である自治会連合会会長に説明し、了解を得た。

まちづくり活動の経過

1. 全体 WS の概要と経過

第 1 回講座：暫定 GrWS 概要（参加者：尾崎地区住民 29 名、学生 12 名）

暫定的に 4 つのグループに分かれ、ワールドカフェ形式で「尾崎地区の良いところや強み、地域の抱える課題」について意見交換を行った。

第 1 グループにおいては、高層団地の住民より自治会の問題が多く出されたが、グループの課題は明示されなかった。第 2 グループでは、「地域の魅力再発見～早咲き桜を活かして～」というテーマが出された。「地域のつながりはあるが、自治会離れも起きている。地域住民だけでなく、外部の方も参加できるイベントがあるとよい。以前メディアで紹介されたこともある「早咲き桜」をテーマにやってみるのはどうか、空き家対策も必要である。」といった意見が出された。第 3 グループは、「尾崎 Reborn」というテーマが設定された。「よいところがたくさんある反面、残念なところもある。今あるモノを活かしつつ、ないモノをつくっていききたい。」第 4 グループは、「あたらしくてふい尾崎」というテーマであった。「普段あまり考えていなかったが、尾崎のよさを再認識できた。団地の開発から約 40 年が経ち、街も人も円熟味も増してきた。団地の 5 年、10 年先を考える必要がある。」という意見が出された。

第2回講座：グループWS（参加者：35名）

前回の振り返りの後、グループ分けを行った。第1回講座の内容をふまえ、事前に担当者等が相談して決定した、「坂・公園がいっぱい」、「自然がいっぱい」、「シニアがいっぱい」、「交流したい」の4つのテーマによりグループに分かれ、活動を開始した。テーマは「活動テーマについて検討しよう！」「活動計画を立てる準備をしよう！」であった。

「坂・公園がいっぱい」グループ（以下公園Gr）では、尾崎は坂と公園が7ヵ所あることに注目した。坂のまちを逆手に取った試みとして、1年を通しての世代間交流と公園利用というアイデアがでた。「自然がいっぱい」グループ（以下自然Gr）は、緑豊かな自然を楽しむために、トレイルマップの作成を実施することになった。「シニアがいっぱい」グループ（シニアGr）は、シニアの方々が現在実施している人気イベント（ふれ合いサロン）をさらにみんなで盛り上げようということになった。「交流したい」グループ（交流Gr）は、夏まつりなどのイベントに若者を引き込もうという試みを予定しており、世代間交流をふくめた多彩なイベントを企画する方向が出された。

第3回講座：グループWS概要（参加者：29名）

テーマは、先進的な事例を参考にし、活動に深みをもたせることであった。まちづくり活動を実践している2団体の事例が報告され、その後グループ毎に意見交換を行った。

最初に発表されたのは、地元の「かかみがはら暮らし委員会」であった。イベントを通した各務原市の情報発信活動の報告がなされた。「各務原の暮らしやすさ、人の温かさ、たくさんの“ステキな魅力”を多くの人に知ってもらいたい」という想いのもと各種イベントを企画・主催していること、「マーケット日和」、「ほしぞら日和」、「かかみがはらスタンド」などのイベント内容が映像とともに紹介された。

次に、「兵庫県明石舞子団地」の担当者より、全国で課題となっているオールド・ニュータウンのまちづくり活動の報告がなされた。地域住民、行政、公社、大学、NPOなど様々な主体が協力し、団地再生に取り組んでいる。具体的な活動として、「リーディング・プロジェクト、まちづくり広場、まちづくり委員会、まちなかラボ（団地住民と学生の交流の場）、県営住宅を学生に提供、住民講座」が組織的に実施されていることが報告された。

第4回講座：グループWS概要（参加者：36名）

4グループに分かれ、テーマの設定と具体的な活動計画の検討がなされた。公園Grでは、公園の有効利用、

大人と子どもの交流、ラジオ体操への参加、公園でのフリーマーケット開催、人生の先輩たちを講師に昔の遊びや軽スポーツの実施等の企画が検討された。自然Grでは、低山に囲まれた自然豊かな尾崎を巡る「尾崎トレイル」をつくることになった。シニアGrにおいては、シニアの人々が余暇を楽しく過ごす社交の場を作りたいとして、現在実施している移動サロンを常設型にしたいという企画が提案された。最後に交流Grでは、尾崎を元気にふれ合える街にするために、イベントを活性化したい。まずは、盆踊り盛り上げたいという方向で進めることになった。

2. グループ毎の自主活動**公園Gr**

7月19日：イベント企画の検討

8月9日：イベント企画の検討

8月23日：イベント企画、フリーマーケットと軽スポーツ

8月30日：尾崎マルシェ案内チラシの作成

9月6日：案内チラシの完成、フェスティバル準備

9月20日：報告会準備、フェスティバル準備

10月4日：尾崎マルシェ準備、アンケート作成

10月25日：尾崎マルシェ準備

11月8日：尾崎マルシェ準備

11月12日：尾崎マルシェ実施

1月10日：最終報告会準備、練習

自然Gr

7月23日：尾崎地区内里山（扇平コース）実地確認・散策、まとめ

8月6日：尾崎地区内里山（三峰山コース）実地確認・散策、まとめ

8月27日：尾崎地区里山（権現山コース）実地確認・散策、まとめ

10月1日：尾崎フェスティバル、中間発表準備

12月25日：最終発表会に向けて準備

シニアGr

7月10日：ミニサロン見学

7月13日：尾崎地区ボランティアハウス「コスモスの里」見学

7月30日：見学内容のまとめ、今後の展開の検討

8月16日：北方町「ひなたぼっこクラブ」見学

9月12日：見学内容のまとめ、常設型サロンの試行について

9月29日：常設サロンの試行について検討

10月4日：チラシの作成、ボランティア、常設サロンの運営について

10月18日：常設サロン試行の検討、アンケート調査について、中間報告会の準備

11月6日：お試し常設型サロン「尾崎サロン」4日間開催

11月20日：お試し常設型サロン「尾崎サロン」3日間開催

12月4日：お試しサロンの振り返り、会計報告、アンケート集計

交流したい Gr

8月5日：尾崎地区夏祭りへの参加、屋台の手伝い

10月8日：尾崎フェスティバルへの参加、パレード、グループ毎にまちづくり活動の発表

3. 第5回全体 WS 概要

参加者は23名であった。各グループ自主活動における活動の評価や今後の展望を検討し、最終報告会の準備を行った。テーマは、「自主活動を振り返ろう！」「最終報告会に向けて準備をしよう！」であった。最終報告会のシミュレーションとして、各グループが行ってきた自主活動の報告を行った。公園 Gr は、公園を活用した「尾崎マルシェ」の開催と公園の在り方についてのアンケート調査の結果を報告した。自然 Gr は、尾崎トレイル（三峰山・権現山・扇平）の紹介と各トレイルの山歩きによるエネルギー消費量の報告であった。シニア Gr は、常設サロンの試行運営の成果が報告された。交流 Gr は、おぎ夏祭りや尾崎フェスティバルなど既存の地元行事への若者の参加による活性化が映像資料で報告された。4グループの模擬発表の後、質疑応答があり、グループ毎に改良点の検討が行われた。

4. 最終報告会概要と成果・課題

参加者は受講者28名、一般来場者56名であった。本講座で実践してきた地域づくり活動についての報告会が行われた。まちづくり活動実践者、地域住民、大学生、大学関係者、岐阜県、各務原市関係者等が参加し、各グループの発表、質疑応答を行った。

公園 Gr は、あまり利用されていない公園の存在意義を見直す活動を実施した。南町公園にて、「尾崎マルシェ」を開催し、フリーマーケットや野点、ゲートボール大会や太極拳の披露などのイベントを実施した。その成果としては、予想以上の反響があり手ごたえを感じたこと、アンケート調査から公園の活性化を望む声を確認できたことであった。こうしたイベントを定期的に開催するには、周囲の支援を巻き込む必要性があげられた。今後の計画としては、地域内の各自治会にもアンケート結果を通知し、公園の利用方法、看板の表記や新しい遊具の設置について当局に提案していく。

自然 Gr は、自然に恵まれた尾崎地区にある里山を健康づくりに活かす活動を実施した。三峰山、権現山、扇平の3座に登山し、歩数・安全面・見晴らし等の景観確認を行うと共に、良いところ、改善すべきところを検討し、ルート図を作成した。また、山歩きの消費カロリーをメッツ（運動強度の単位）により算出し、健康管理に活かすよう提案した。活動の成果としては、身近な里山のルート図を作成し、健康増進のための消費カロリーを紹介できた。今後の計画としては、定期的なメンテナンス活動を行い、ルートやメッツの広報活動を実施していきたいとした。

シニア Gr は、経験豊富なシニアが活躍する場及びシニアが集える地域の居場所づくりをめざし、常設型サロンを9日間試行的に開設した。さらに、サロン利用者にアンケート調査を行い、需要が高いことが把握できた。成果等については、一人暮らしの方が多く集うなど「居場所」としての機能が果たせ、今後の開催の要望があるなど、利用者にとって好評だった。さらに、サロン利用者が、会場設営に協力するなど、自主的な支援の意識が芽生えた。長期的に運営するには、人的・経済的対応策が必要である。今後、各務原市尾崎地区社協と情報共有し、継続できるようにしていきたい。

交流 Gr は、世代を超えた交流を活発に行うため、既存の地域行事に若者たちが参加した。「おぎ夏祭り（盆踊り）」では、学生の専門性を活かし、おすしなどの屋台を出店すると共に、会場を盛り上げるためにライブを実施した。また、「尾崎フェスティバル」に、ハロウィンの仮装で参加し、子どもたちにお菓子を配布したり、パレードを行ったり、ライブを実施したりして会場を盛り上げた。活動成果等として、今まであまり参加のなかった若者世代が参加したことで、行事が盛り上がった。また、他の行事についても地域の人から声をかけられるようになった。今後、引き続き地域行事に参加していくと共に、多世代のまちづくり参加をすすめていきたい。

5. 振り返りシートの分析

質問項目の回答

各回の WS 後にグループ毎に作成した振り返りシートから、まず選択形式の質問項目に対する回答を検討した。

第2回 WS

テーマや課題を共有できた、リラックスして参加できた、いろいろな意見に関心をもてた、次々と話題が繋がった、全員が参加できた、テーマや課題を可視化することができた、尾崎地区の課題がわかった（あてはまる・ややあてはまるが80～90%）、尾崎地区の良いところや強みがわかった、準備に必要なことがわかった、役

割分担ができた（あてはまる・ややあてはまるが60～70%）。

第3回 WS

リラックスして参加できた、グループ活動の参考になった、身近な問題としてとらえることができた、まちづくり事例に興味を持てた、わかりやすかった（あてはまる・ややあてはまるが80～90%）、テーマや課題を共有できた、尾崎地区の課題がわかった、尾崎地区の良いところや強みがわかった、尾崎地区との類似点が見いだせた、活動の準備に必要な事項がわかった（あてはまる・ややあてはまるが70～75%）。

第4回 WS

テーマや課題を共有できた、リラックスして参加できた、いろいろな意見に関心をもてた、全員が参加できた、活動目的が明確になった、活動内容が具体的になった、対象と場所が明確になった、活動スケジュールが明確になった（あてはまる・ややあてはまるが80～90%）。役割分担が明確になった、必要物品等が明確になった（あてはまる・ややあてはまるが40～50%）。

最終報告会

満足度については、最終報告会（満足・やや満足60%）、講座全体（満足・やや満足73%）であった。講座内容については、難易度（適当40%）、講座回数（適当65%）、1講座の時間（適当70%）であった。今後の意向では、発展させたい（46%）、分からない・無回答（54%）という結果となった。

自由記述

さらに振り返りシートの自由記述の内容を、ポジティブコメント、ニュートラルコメント、ネガティブコメントに分類したものを表1に示した。

第2回では、「今後の活動に期待する」などポジティブな回答3名、「行政側が何をしたいか方向性がつかめない」などネガティブ回答5名、「参加人数の差によって活動範囲が違って来る」など中性的回答2名であった。第3回においては、ポジティブ回答1名、ネガティブ回答1名、中性的回答4名であった。第4回については、ポジティブ回答1名、ネガティブ回答1名、中性的回答4名であった。最終発表会では、ポジティブ回答3名、ネガティブ回答3名、中性的回答6名であった。

成果と展望

地域住民と大学生が参加し、4つのグループに分かれて、課題探求と計画立案から自主活動の実施、振り返りまで、一連のまちづくり活動が行われた。活発なグループ活動がなされ、成果報告の内容もポジティブなもので

あった。これらの成果を今後のまちづくり活動においてさらに発展させることが望まれるが、平成30年度の取り組みとして、ミニサロンの活性化、尾崎トレイルの整備、さらに本講座では取り上げられなかった尾崎小学校放課後クラブの支援が行われている。

また、この講座は、大学生と市民の協働が一つのポイントであった。学生は卒業論文の一環として、あるいは大学院ゼミの一員として参加したが、自然Grでは、トレイル・コース毎にメッツを使用して消費カロリーを計算するなど、学生の専門性が発揮されていた。また、講座参加者を対象に、修士論文の調査を行ったケースも見られた。地域貢献を通して、学生が学外で学ぶ場を地域の方に提供してもらう貴重な機会となった。

全体ワークショップの第2、3回の振り返りシートから、質問項目への回答はおおむねポジティブであった。最終報告会の調査の結果でも、まちづくり活動への積極的な回答が大半を占めた。しかし、満足度はやや低く、難易度はやや不適当であり、今後の参加に否定的な傾向もみられた。前半のWSでは参与意識の高い参加者も、自主活動が進むにつれて、課題を難しく感じ、負担感が増したと考えられる。この講座への参加者の多くは自治会の役員等の経験者も多く、目的や期待に応えようとする姿勢が強かったとも考えられる。すなわち、質問項目への回答には要求特性の影響も推測されるので、今後、参加者を個別に面接調査することによって、実践活動の中で参与意識がどのように変化したか検討することが必要と考えられる。

また、いくつかの課題が考えられる。まず、本講座の開始時にみられた、「行政側の方向が不明、地域だけでは難しい」といったコメントから、地域住民が主体の活動であるという企画の趣旨や地域の立場についての理解不足が示唆された。今後、地域のまちづくり活動には、地域の担い手が官から民へシフトするという「新しい公共」の概念の浸透が望まれる（大平,2017）。さらに、行政と住民がお金ではなく、互いの技術と知恵をもって取り組むまちづくりの理解が必要であろう（木下,2015）。最後に、大学の地域貢献について考察したい。大学の地域貢献は第一に、多くの大学で行われている公開講座や専門的支援として、大学の教育・研究を地域住民に提供するものである（池田・藤谷・伊藤・箕浦・安藤・徐・橘田・伏見,2005；白戸,2009；若杉・篠田・長谷部・杉山・瀬地山,2006）。第二に、大学のカリキュラムに組み込まれた課題解決型教育（PBL）の一環として行われるものである（上拂,2014；古川・奥洞,2016；今永・松林・益川,2017）。最後に、ボランティア活動として

表 1 GrWS 振り返りシート「自由記述」の分析（頻度）

ポジティブコメント	ニュートラルコメント	ネガティブコメント
第 2 回 GrWS		
<p>今後の活動に期待</p> <p>一時的な取組みで終わらせることなく、発展的な施策を展開していきたい</p> <p>かたい古くからの考えに、若者がどう働いてくれるか楽しみ</p> <p>(3)</p>	<p>人数の差によって、活動範囲が違ってくる</p> <p>グループ 3 はメンバーが多いため 2 つに分かれてもよいのではないか</p> <p>(2)</p>	<p>行政側が何をしたいか方向性がつかめない</p> <p>学生をリーダーにしたのはいかなものか</p> <p>単年度で終わってしまうのではないか</p> <p>他のグループのジャンルがやってみたかった</p> <p>たった 1 回イベントをするだけで、まちづくりができるとは思えないし、課題解決にもならない</p> <p>尾崎地区の中でも地域差・温度差があるので簡単には変わらない</p> <p>(5)</p>
第 3 回 GrWS		
<p>話を聞けてよかった</p> <p>有能なソフト面を前向きに実施する必要性を感じた</p> <p>(2)</p>	<p>もっと参加者に出席してほしかった</p> <p>ハード面の整備が重要</p> <p>今回の活動が単年度で終わることなく継続する必要がある</p> <p>人とのつながりが重要</p> <p>(4)</p>	<p>行政や公社と連携することが必要、地域だけでは難しい</p> <p>(1)</p>
第 4 回 GrWS		
<p>活動内容が具体化してきた</p> <p>(1)</p>	<p>まずは尾崎に住む人々が、よりよく交流できる場が必要</p> <p>(1)</p>	<p>今ある課題を明白にしなければ具体的解決策はでない</p> <p>(1)</p>
最終報告会		
<p>尾崎の現状を知り活動する中で、熱い方も多く捨てたものではないと思った。</p> <p>グループ内の交流は楽しかった</p> <p>講座に参加したことにより知り合いが増えてよかった</p> <p>(4)</p>	<p>4 チームは多すぎた。分散されもったいない。</p> <p>来年度以降経済的支援はあるのか</p> <p>東海学院大学の学生と交流を続けるために、どうするかが課題</p> <p>活動を継続させるために大学に協力してもらおうとよい</p> <p>活動を継続させるためには若者の参加が必須。</p> <p>地元大学の大学生ではなく、同地区在住の高校生を中心に取組むと良い</p> <p>(6)</p>	<p>今後活動を継続するのは困難</p> <p>本講座の主旨や行政との関わりがいまいち分らなかった</p> <p>自主活動のサポートが少なすぎる</p> <p>(3)</p>

学生や教職員が地域づくりに参加する形態である。ここで、地域は学生の社会貢献活動を期待しているが、大学は地域における研究の公開や研究活動を重視するというずれがみとめられる（阿部,2008）。

今回の試みは後者のカテゴリーに入るが、東海学院大学においては平成30年度「各務原ニンジン」の商品開発など管理栄養学科が中心となり活発な地域貢献活動が行われている。しかし、ボランティア活動が単位化されていないこともあり、他の学科のまちづくり活動は低調であり、学生の積極的な参加を促進するような体制づくりが望まれる。

謝辞

「まちづくり講座 in 尾崎」に参加して頂きました尾崎の皆様、ご支援を頂きました岐阜県環境生活部県民生活課、各務原市産業活力部いきいき楽習課のスタッフの皆様に感謝いたします。

注

1. 本報告の一部は、日本心理学会第82回大会（2018、仙台）において発表された。

引用文献

- 阿部耕也 2008 大学と地域連携の要因分析の試み：大学と地域の連携によるまちづくり調査から 静岡大学生涯学習教育研究,10,3-20.
- 浅野秀重 1999 地域づくりのための生涯学習 金沢大学大学教育開放センター紀要 19, 143-152.
- 岐阜県平成29年度地域づくり人材養成講座 2017 <https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/npo-tiiki/community/11260/chiikidukurizinzaiyousei.html>
- 岐阜県県政アンケートモニター 2011、2015 https://www.pref.gifu.lg.jp/kensei/koho-kocho/iken-teian/11103/index_2800.html
- 岐阜県生涯学習振興指針 2017 <https://www.pref.gifu.lg.jp/kensei/keikaku-kaikaku/syuyo-keikaku/kansei-seisaku/syougaiyakusyuu-shinkoushishinH29-H33.data/shishinH29-H33.pdf>
- 池田政子・藤谷 秀・伊藤ゆかり・箕浦一哉・安藤淑子・徐 正根・橘田芳子・伏見佐智子 2005 山梨県立女子短期大学の生涯学習事業と地域づくり 山梨県立女子短期大学紀要 38,31-46.
- 今永典秀・松林康博・益川浩一 2017 インターンシップによる大学と地元産業界の協働教育：岐阜大学地域協学センター「次世代地域リーダー育成プログラム 産業リーダーコース」を中心とした多様なインターンシップ事例より 岐阜大学教育推進・学生支援機構年報 3,79-91.
- 木下 斉 2015 稼ぐまちが地方を変える NHK 出版新書
- 高齢者白書 2016 http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/28pdf_index.html
- 宮本邦雄・磯辺和正 2015 生涯学習としてのテニス参与の年代間比較 東海学院大学紀要,9,119-127.

- 宮本邦雄・磯辺和正 2016 生涯学習としてのテニス非継続に関わる要因 東海学院大学紀要,10,39-45.
- 古川未帆・奥洞知依 2012 学生の力を活かすまちづくり：静大フューチャーセンターの取り組み（生涯学習指導者研修事業「公民館の力を磨く」） 静岡大学生涯学習教育研究,18,61-66.
- 大平 滋 2017 人口減少期を迎えての熊谷市のまちづくりと課題—生涯学習社会におけるまちづくり— 人間の福祉 31,127-139.
- 白戸 洋 2009 大学と公民館が連携した学習活動によるコミュニティの再構築：公民館を主体とした新村地区の地域づくり 松本大学研究紀要 7, 177-192.
- 上拂耕生 2014 地域と大学の連携による地域づくり教育プロジェクト—熊本県立大学総合管理学部 KUMAJECT（クマジェクト）の取り組み事例から— アドミニストレーション 21,34-50.
- 若杉雅夫・篠田美里・長谷部和子・杉山喜美恵・瀬地山葉矢 2006 子育て支援プログラム「子育て親育ち・学生の心の育成」：あそびの森の試み 東海女子短期大学紀要 32,53-60.

A Report of “Lectures on Community Development in Ozaki” : A Gifu Prefectural Project to Develop Human Resources in 2017 — Commitment of the Participants to Lifelong Learning on Community Development — MIYAMOTO Kunio